◇◇

「海の生き物を守る会」メールマガジン No. 188　　2016. 11. 16（水）

うみひるも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage：http://e-amco.com/

◇◇

「今月の海の生きもの」　**ハナカジカ**　***Cottus nozawae***

硬骨魚類カジカ科カジカ属の一種で、河口から上流の河川・湖に生育する。日本固有種で北海道全域と東北の一部（青森県・岩手県）に分布する。北海道のレッドデータブックでは「絶滅に留意する必要がある種」とされ、環境省のレッドリストでは、東北の分布域において「絶滅のおそれがある地域個体群」とされている。体長は 15cm 程度。体色は褐色～暗褐色で、白い斑紋を散らす。鱗はない。北海道などの低水温に適応しており、清浄な水に棲む。水質の悪化で絶滅することが多い。日中は石や礫の隙間などに潜み夜行性で、小魚やエビ、水生昆虫などを食べる肉食魚。極めて貪食として知られる。飼育していると共食いもしばしば見られる。卵は石の下などにまとめて産む。孵化するまで新鮮な水を送り保護するのは雄の勤めである。

(青森県西海岸の小河川河口域にて　田中のぶ子氏**撮影**)

目次

「今月の海の生きもの」ハナカジカ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.「海の生き物を守る会」の活動について・・・・・・・・・・・・・・2
2.「ウミガメ 切手コレクション」（19）立川賢一・・・・・・・・・・・6
3.海の生き物とその生息環境に関するニュース・・・・・・・・・・・7
4.海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報・・・・・・・・9
5.海の生き物とその環境に関する出版物および CD・・・・・・・・11
6.「きらめく動物たちの命と海　久保田信の白浜だより」（111）・・11
7.「有明海と三陸の水辺から」（43）田中 克・・・・・・・・・・・13
8.みんなのひろば・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
9.事務局便り ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
10.編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

1.「海の生き物を守る会」の活動について

【活動予定】

●海の生きものを守るシンポジウム 2017
「失われる沿岸の自然と公共事業―辺野古・諫早・泡瀬・三陸・湘南」（仮称）
2017 年 2 月 18 日　京都市梅小路公園緑の館

辺野古をはじめとして、日本各地で公共事業による沿岸の環境破壊が進んでいます。その大きな原因は沿岸の環境を守る一貫した国の政策が、これまでほとんど無かったことを挙げることができると思います。生物多様性条約の COP10 で日本政府が世界に公約した愛知ターゲットについては、少なくとも海の生き物に関しては、達成できる見込みは少ないと言わざるを得ません。各地の沿岸の生き物と環境が公共事業によってどのような状況にあるのかを報告していただき、問題は何か、どうすれば良いのか、これから何が必要なのかを、皆様と議論したいと思います。寒い時期ですが、ご都合を合わせて、半日、海の生きものを守るためにどうすれば良いかご一緒に考えてください。

日時：2017 年 2 月 18 日（土）13:30~16:30　／　会場：梅小路公園「緑の館」1F イベント会場
※京都水族館や交通博物館のある公園の中央部にある建物で、日本庭園「朱雀の庭」が併設されています
アクセス：徒歩の場合→「京都」駅（JR・地下鉄・近鉄）中央口より塩小路通を西へ徒歩約 15 分または JR 山陰本線「丹波口」駅より南へ徒歩約 15 分

バス利用の場合→京都駅前（B3 のりば）から急行 103・急行 104・急行 110 系統、86・88 系統で「七条大宮・京都水族館前」または「梅小路公園・京都鉄道博物館前」で下車すぐ。または、205・208 系統で「梅小路公園前」下車

プログラム（予定）

13:00 開場

13:30~13:40　　開会挨拶　　向井　宏（海の生き物を守る会）

◇講演

13:40~14:10　　「閉め切りから 20 年の有明海・諫早湾」**佐藤正典**（鹿児島大学）

14:10~14:40　　「泡瀬干潟の現状と失われたもの」**前川盛治**（泡瀬干潟を守る連絡会）

14:40~15:10　　「三陸の森里海のつながりを断絶する巨大防潮堤」**田中　克**（舞根森里海研究所）

15:10~15:20 休憩

15:20~15:45　　「辺野古・大浦湾のサンゴ礁の危機と再生」**安部真理子**（日本自然保護協会）

15:45~16:10　　「オリンピックにより開発の危機に晒される相模湾」**大久保奈弥**（東京経済大学）

16:10~16:30　　「沿岸の危機を守るための提言」**向井　宏**（海の生き物を守る会）

16:30 閉会

●総会を開催

海の生き物を守る会の 2016 年度の報告と 2017 年度の活動について話し合う総会を、以下のように京都市で開催します。夕食をとりながら行う予定です。海の生き物を守る会会員の方はぜひ参加してください。

日時：2017 年 2 月 18 日 17:30～19:30

会場：「京野菜レストラン」京都市梅小路公園「緑の館」シンポジウム会場横

会費：3000 円（飲み放題付）

議題：2016 年度活動報告・同会計報告、2017 年度活動計画・同役員選出ほか

★参加予定者は、向井 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp にご連絡ください。

＊＊

砂浜の自然を守るために！

全国の砂浜海岸生物調査にご協力ください

秋田、山形、岩手、福島、茨城、東京、富山、石川、岡山、佐賀、熊本県は未調査です

現在まで246枚、134カ所を調査　砂浜フィールド図鑑（2）も刊行予定

海の生き物を守る会では、全国の砂浜海岸で生物調査を進めてきました。危機的な状況が続いている砂浜とその周辺に棲む生き物のために、日本の砂浜を取り戻そうと計画された調査です。今年10月からは自然保護助成基金プロ・ナトゥーラ・ファンドの支援を受けて、来年9月には第二次の中間報告書を発行する予定です。また、研修会を石川県、神奈川県で行うほか、「砂浜フィールド図鑑（2）海浜植物」の刊行も予定しています。

調査は誰にでもできる方法で計画されていますので、少しでも多くの人が多くの海岸でこの調査に参加していただけるようにお願いいたします。当会のホームページには、ワードファイルで調査の方法と報告用紙が掲載してあり、ダウンロードが可能です。

これまでに会員や非会員の皆さまから246枚の調査票が寄せられ、全国134カ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸での調査が必要です。まだ調査が1カ所も行われていないのは、秋田、山形、岩手、福島、茨城、東京、富山、石川、岡山、佐賀、熊本の都県です。ぜひご協力をお願いいたします。また同じ海岸でも季節が違えば、結果が異なります。いつでも、どんなときでも調査はできます。ぜひ一度、ホームページから調査マニュアルをお読みください。

●保全すべき砂浜を推薦してください

海の生き物を守る会では、砂浜海岸生物調査の一環として、全国の砂浜でぜひ保全すべきだと思われる砂浜を募集しています。今年度末までに「ベスト30」を決定し、そのリストを公表して、今後の保全活動に貢献したいと思いますので、ぜひ推薦をよろしくお願いいたします。推薦にあたっては、その砂浜の数枚の写真とその他、生物情報、自然度などについても、お知らせください。

これまで推薦された砂浜の中には、閑上浜のように巨大防潮堤がその後建設されてしまい、もう守りたい砂浜ではなくなってしまったところもあります。日本の砂浜はどんどん壊されつつあります。早く保護すべき砂浜を指定して、保護活動に役立てましょう。

＊＊

さしあげます！

下記を希望者に差し上げます（送料はご負担ください）。

向井　宏 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp までお知らせください。

◎月刊「海洋」2002－6　総特集：森と海の相互作用　2002 年　海洋出版　**1 部**

◎平成 15 年度「ジュゴンと藻場の広域的調査報告書」　2004 年　環境省自然環境局　**1 部**

◎APN 国際セミナー「生物多様性と人との調和及び共生を目指した自然共生社会」報告書」

2009 年　APN（アジア太平洋地球変動研究ネットワーク）　**1 部**

◎GREEN AGE　2015-4 特集・これからの海岸林造林を考える　2015 年　日本緑化センター　**1 部**

◎鷲谷いづみ他編「保全生態学の技法 調査・研究・実践マニュアル」2010 年　東京大学出版会　**1 部**

◎向井　宏監修「森と海をむすぶ川」　2012 年　京都大学学術出版会　**1 部**

◎向井 宏 論文 別刷り　**余部あり**　「陸域―沿岸域統合系における藻場生態系」　月刊「海洋」2005　／「海域・海洋保護区の効果と現状」　環境情報科学　2009　／「ジュゴンの摂餌生態：現状と展望」　海洋理工学会誌　2009　／「干潟・藻場の再生事業：その問題点」　地球環境　2011　**◎向井 宏**　「**第一編　厚岸地方の自然環境**　第二章　厚岸町の特色ある生態系」新厚岸町史（通史編・第一巻）　2012 年　**4 部**／「同　第三章　厚岸町の動物」　同　2012 年　**3 部**／「同　第四章　厚岸町の植物」　同　2012 年　**4 部**

お知らせコーナー

●辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会の活動について

海の生き物を守る会が参加している「辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会」では、辺野古に故郷の土砂を送らないよう要請する署名活動を行い、11 月 1 日に第二次署名 4 万 8000 筆を首相あて提出しました。第一次署名は 5 万 4000 余筆でしたので、これまで協議会が結成されてから、わずか 1 年 3 カ月で 10 万筆を超える署名が集められました。11 月 1 日に衆議院第二議員会館で行われた環境省・防衛省との交渉では、沖縄県へ持ち込まれる土砂が外来種を伴う危険性について、各省の対応を聞きましたが、どちらも責任ある回答を得られませんでした。今後とも、追究していきます。

活動を広めるためにパンフレットを発行しました（写真は表紙）。1 部 500 円をカンパとしていただいています。安倍政権は、沖縄の圧倒的な民意を無視して、西日本の 14 箇所の山を削り、辺野古へ送って、辺野古の海の埋め立てを強行しようとしています。辺野古の海を守る手立ての一つとして、この活動に賛同する意味からも、ぜひご購入をお願いします。ご希望の方は下記までお知らせください。

向井　宏 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

1 部 500 円＋送料のお振り込み先：ゆうちょ銀行 19230-2848391　ﾑｶｲﾋﾛｼ

●好評販売中！　砂浜フィールド図鑑（1）『日本のハマトビムシ類』

海の生き物を守る会では、砂浜海岸生物調査を一般の人々に呼びかけています。このたび「砂浜フィールド図鑑」シリーズ（1）として、どの浜辺でも必ず見かけるハマトビムシ類の図鑑を刊行しました。

A5 判 14 ページ。1 冊 100 円で頒布中です。会員には 1 冊に限り無料（送料のみご負担ください）でお送りします。ご希望の方は下記までお知らせください。

向井　宏 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

1 部 100 円＋送料のお振り込み先：

ゆうちょ銀行 19230-2848391　ﾑｶｲﾋﾛｼ

2. ウミガメ 切手コレクション（19）　立川賢一

ウミガメの保護活動と調査・研究－2

ウミガメの保護活動と調査・研究が始まる

保護されたウミガメの健康状態を診察

潜水によりアオウミガメの生活状況を観察

3. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

お知らせ：うみひるも 180 号の編集後記でもお伝えしました通り、このニュース欄の情報源はマスコミ・団体の会報・その他多岐にわたります。海の生き物に関する最新情報を共有するため、事実と思われる内容を紹介し、それについて必要と思われる範囲で論評もしています。誤解を招かないよう、今号より文責者名をそれぞれの記事毎に明記することとしました。けれども独自の裏付け調査をしているわけではありません。その点は、ご承知おきください。読者からの投稿も大歓迎です。

【世界】

●世界最大の海洋保護区　南極ロス海に

日本も参加している 25 の国と地域が作る「南極の海洋生物資源の保存に関する委員会（CCAMLR）」が、5 年の協議の結果、南極のロス海に世界最大となる海洋保護区を設置することに合意した。範囲は 155 万㎢におよび、モンゴルの国土とほぼ同じ広さだ。ロス海は、現在の地球上ではもっとも人間の手が入っていない自然の海で、ペンギンや鯨類、アザラシなどの大型動物を含む多様な生物が生息している。「最後の海」とも言われるロス海に広大な海洋保護区が設立されたことで、世界の海の生きものの最後の砦が、ぎりぎり守られたことになる。この美しい海を後の世代に残すための歴史的な一歩で、嬉しいニュースである。（文責：向井　宏）

●サメの奇形　世界各地で発見例が増加　　一つ目・双頭

世界各地でサメ類の奇形が増えているらしい。目が一つだけのサメ、双頭のサメなど、各地で発見例が相次いでいる。双頭のサメは、2008 年インド洋でヨシキリザメ、2011 年カリフォルニア湾とメキシコの北西沖で、やはりヨシキリザメ、2013 年フロリダ沖でオオメジロザメの胎児で発見されている。これまでの例ではヨシキリザメに双頭の胎児が見つかることが多いようだ。最近では、ヤモリザメの仲間のアトランティック・ソーテール・キャットシャークの発生途中の卵で、双頭の胎児が、研究室の飼育しているサメから発見された。このサメは上記のサメたちと違って卵生である。卵生のサメで双頭が見られたのはこれが初めての例である。研究者らは、これまで卵生の双頭のサメが見つからなかったのは、正常に発生が進まず、人間の目に触れる前に死んでしまうからではないかと考えている。つまり、自然界ではもっと多いのではないかと考えている。さらに、最近カリブ海のベネズエラのマルガリータ島沖で、ホシザメとヨシキリザメでも双頭の個体が発見されている。これらサメ類の奇形の原因はまだよく分かっていない。ただ、遺伝子の異常が引き起こしたものであるらしい。遺伝子の異常が何によって引き起こされたかは不明である。可能性としては、ウイルス感染症、化学物質による汚染、放射性物質が考えられるが、研究者らは、乱獲によってサメ類の個体数が減少したためのボトルネック効果（遺伝的浮動）を疑っている。（文責：向井　宏）

【全国】

●9 万 4000 筆の署名を提出　辺野古埋立の土砂を西日本から運ばせない

11 月 1 日に、辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会は政府交渉を行い、環境省・防衛省に対して、西日本各地から辺野古埋め立て用土砂が搬出される計画について、政府の対応をただした。交渉には民進党近藤昭一、社民党福島みずほ、沖縄の風伊波洋一、共産党赤嶺政賢議員ら 8 名の国会議員と 14 名の議員秘書が同席した。この日、交渉の中心的な議論は、有害な外来種の土砂混入をどのようにして防ぐことができるのかという問題だった。環境省は業者と防衛省がきちんと対応するはずと言い、防衛省は「法令に則り、環境に配慮して適切に対処していく」と繰り返すばかり。沖縄県議会議員が奄美大島の採石場を視察した結果、どこの採石場でもハイイロゴケグモの存在が明らかになった。沖縄県の条例では、業者は特定外来生物の混入がないことの証明を義務づけられている。業者が行っている対応策は、シャワー水による 120 秒の洗浄、監視者による外来生物混入の監視などである。しかし、政府交渉で奄美大島採石場に辺野古へ搬出予定で積まれていた「岩ズリ」は、細かい土のようなものだ。全国連絡協議会の大津幸夫共同代表は、「この岩ズリをどうやって洗浄できるのか」「洗浄したらみな無くなってしまう」と詰め寄ったが、防衛省は一言も回答できなかった。この交渉で、防衛省も環境省も、外来種の混入による沖縄島の生態系への悪影響について、何も考えていないことが明らかになった。

ちなみに業者による外来生物混入の監視については、私が奄美大島で見た監視場所は写真に示したように、遠くから双眼鏡で監視することになっている。混入の危険があると考えられているハイイロゴケグモやアルゼンチンアリなどの混入をこんな対応で防ぐことができるとは、きっと業者も考えていないだろう。それでも形だけやれば良いだろうと思っているのは、政府がやることだから、無理を通せると思っているからだろう。

外来生物監視所（屋根のある台）から双眼鏡で監視するという（奄美大島で）

環境省には、多くの採石場前面の海域が「生物多様性からの重要海域」であることを指摘して、その保全への対応を聞いたが、「自然的・社会的条件に基づいて適切に対処する」「個別的事情・事案には答えられない」を連発するばかり。重要海域に対する保全対策は何も考えていないことも明らかになった。また、交渉の過程で防衛省が辺野古基地建設のための埋立関連の 2016 年度予算に土砂購入予算 861 億円を含む 1600 億円が計上されていることが明らかになった。861 億円の土砂購入費は、まだ業者との契約に至っていないとして未執行とされたが、業者の中にはすでに辺野古への土砂搬出を予定して新しい採石場の開発や閉鎖した採石場の再開などの動きがあり、未契約は形ばかりであることが推測される。

この後、内閣府へ行き、西日本から辺野古への土砂を搬出することに反対する安倍首相あて署名 4 万 1470 筆を提出した。1 年前に提出した 5 万 4000 筆に加えて、合計 9 万 5000 筆超となった。（文責：向井　宏）

【九州】

●泡瀬干潟埋立訴訟控訴審で「経済的合理性がある」　住民側敗訴

　11 月 8 日、福岡高裁那覇支部（多見谷寿郎裁判長）は、泡瀬干潟の埋立事業に反対する住民 267 人による埋立訴訟の控訴審で、住民の公金支出差し止めの訴えを棄却し、県や市による泡瀬干潟の埋立は「裁量権の範囲であり、経済的合理性がないとは言えない」とした地裁の判決を支持した。住民は今年 3 月の地裁判決後に控訴、高裁では「環境省は泡瀬海域も『生物多様性にとって重要な海域』としている」と指摘し、中部沖縄経済の活性化は、埋立以外の政策で達成できると主張した。住民意見を却下した多見谷裁判長は、辺野古基地建設を巡って国の主張を一方的に取り入れ、「普天間の代替は辺野古が唯一」と聞かれてもいない判断を示した札付きの裁判官だ。権力側の言い分をそのまま取り入れる判決は十分予想されたが、予想通りの判決だった。（文責：向井　宏）

【沖縄】

●石西礁湖でサンゴの半分が死滅

　今年夏に続いた高水温で、沖縄県のサンゴ礁が白化し、その結果が心配されていた。11 月 9 日、環境省那覇自然環境事務所が、国内最大のサンゴ礁のある石西礁湖（石垣島と西表島の中間にあるサンゴ礁）で 9～10 月に調査した結果を発表した。調査は石西礁湖の 35 点で行われ、そのうち 97%の地点で白化が観察された。白化現象は、サンゴに共生している褐虫藻がサンゴ本体から抜け出して、サンゴが白くなってしまう現象であるが、この状態ではまだサンゴ本体は生きている。白化状態が長く続くとサンゴは栄養不足で死亡してしまう。調査点の半分以上の 56%の地点で、サンゴが死滅していたことも報告された。今年の夏の水温は平均でも 30℃を超える期間が長く続き、台風の襲来も遅かったため、石西礁湖での白化が進んだとみられる。さらに死亡率が高くなっているため、石西礁湖でのサンゴの回復は短期間では難しいと環境事務所ではみている。

　一方、10 月に行われた慶良間諸島の 36 地点での調査では、白化率は 15.2%と低く、回復の可能性は高いとされている。（文責：向井　宏）

＊＊

4. 海の生き物に関する運動･行事･他の団体の情報

【関東】

◆観音崎自然博物館イベント

１.「海藻おしばでクリスマスカードを作ろう」

　さまざまな色や形の海藻をおしばにして、カラフルなクリスマスカードを作りましょう。海藻の役割についても学べます。

日時：2016 年 12 月 4 日（日）10:00～12:00

場所：観音崎公園ボランティアステーション

定員：24 名（申し込み順）

参加費：500 円
対象：一般（小学生以下は保護者同伴）
持ち物：手拭用タオル
講師：海藻おしば協会会長　　野田三千代さん
★申し込み：電話で 12/1 までに参加者全員の氏名・年齢・住所・電話番号をお知らせください
問い合わせ先：観音崎自然博物館（神奈川県横須賀市鴨居 4 丁目 1120 番地　tell: 046-841-533）

2.「夜の磯で生き物ウオッチング」

冬の大潮で、夜行性の生物を観察しよう
日時：2016 年 12 月 13 日（火）21:00～23:30 頃　※雨天中止
料金：2100 円（18 歳以上　大人限定）
問い合わせ先：観音崎自然博物館（神奈川県横須賀市鴨居 4 丁目 1120 番地　tell: 046-841-533）

【近畿】

◆第３回　大阪湾スナメリ探検クルーズ

日時：2017 年 3 月下旬　実施予定
出港：岡田浦漁港（大阪泉南）
主催：大阪自然環境保全協会（ネイチャーおおさか）
問い合わせ：sunameri2016@nature.or.jp

【中国】

◆上関プランクトン調査　参加者募集

上関の自然を守る会では、11 月 19 日（土）に、「奇跡の海」と言われる上関海域でのプランクトン調査を行います。午前 9 時～午後 3 時で、5 点での稚魚ネットによる動物プランクトン調査です。この海域に生息している希少なカンムリウミスズメやオオミズナギドリ、スナメリなどの餌としての稚仔魚・大型動物プランクトンを採集することを目的としています。いっしょに調査に参加してみたいという方は、上関の自然を守る会（高島 midori.t@crocus.ocn.ne.jp または向井 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp まで事前にご連絡ください。調査に出かけるには遠くからの場合は前日からの宿泊が便利です。事前に申し込めば、同会の「ひよりみ荘」に宿泊も可能です。調査では、運が良ければカンムリウミスズメなどの鳥類、スナメリなども観察できる可能性があります。ただし、乗船して海上での作業ですので、天候次第では直前に中止もあり得ます。また、天候によっては船酔いも。ご承知おきください。

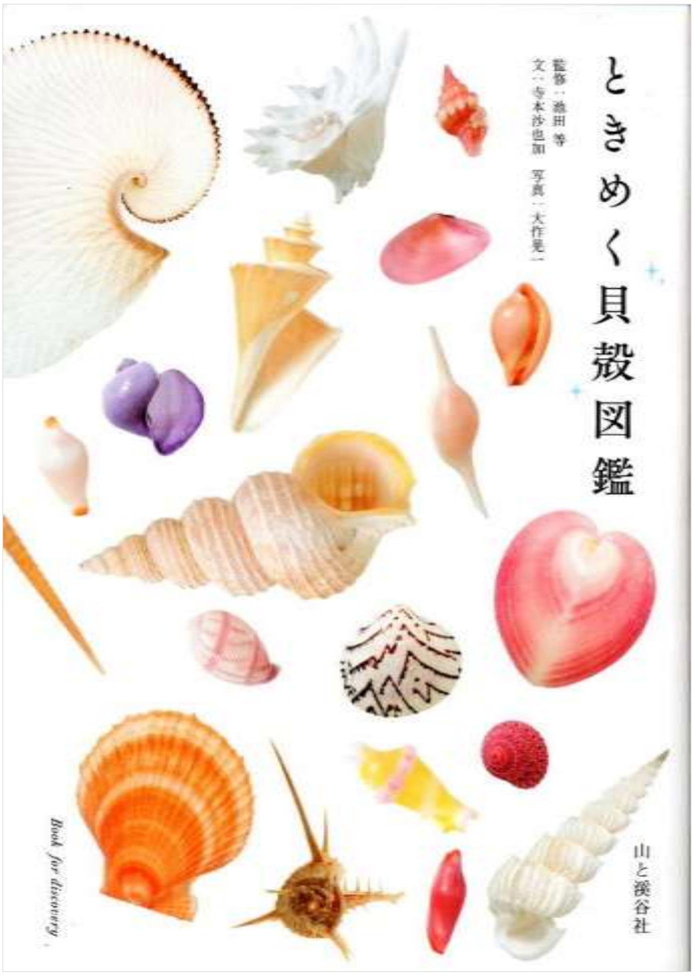
また、翌日 20 日（日）午前中には、岩国市内で採集したプランクトンの選別作業を行います。普段見たことのないプランクトンを見ることができます。選別作業は子どもさんでもできます。ぜひご一緒に作業をやってみませんか。採集調査には行けないが、選別作業なら協力できるという方も募集しています。

なお、このプランクトン調査は、2 カ月に 1 回実施しています。11 月の調査には行けそうもないが、いつか行ってみたいと思われる方も、ご連絡下さい。次回は 1 月の予定です（日程は未定）。

5. 海の生き物とその環境に関する出版物およびCD

●池田　等監修、寺本沙也加著「ときめく貝殻図鑑」　山と渓谷社発行

pp.127　(2016)　　¥1,600(+税)



星空・きのこ・チョウ・鉱物・コケ・妖怪・小鳥・猫などなど、山と渓谷社が出している「ときめく・・・」シリーズの一巻として出版されたこの本の著者は、東邦大学１年の女子大生。高校生の頃から、岩礁性の二枚貝の研究に打ち込み、その傍ら貝殻の美しさに魅せられたという。若い女性らしい文章と編集、貝殻収集に「ああこんな見方や感じ方があったんだ」と驚いた。貝拾いや貝殻の図鑑がたくさん出版されるようになった現今だが、これは新しい感性を見つけたように思った。もちろん写真で示される貝は、多様な貝の種類のほんの一部であるが、その造型の美しさは、いわずもがな。読者の心を引きつけて、海辺に出かけてみようと思わせるものがある。きらめく海へのいざないをどうぞ。（向井 宏）

＊＊

6. きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより(その111)】

生きたウミウサギを潮間帯で発見

2016 年 9 月 20 日、台風 16 号が紀伊半島南端の田辺市に上陸した。その通過直後の 21 日に、大阪大学の主に外国人学部留学生（18 名）を対象とした臨海実習を担当した。実習担当日はあいにく潮位も高く、京都大学瀬戸臨海実験所の北浜では海岸生物がなかなか採集できなかった。そこで反対側の円月島（編注：えんげつとう、正式名称「高嶋」）のすぐ前にある番所崎の方へ移動した。そこもこの日の最干潮時の 14 時半前

後になってもタイドプールには潮がどんどんさしこんでおり、状況は芳しくなかった。灯台のすぐ南側の広い岩礁に最後に行った。そこにはタイドプールが多数あり、渚から離れている所ではなんとか海岸生物が観察・採集できた。

台風通過のおかげでこの日は涼しくなっており、曇天で、風もさわやかに吹いていた。それでも、学生の中には水中メガネをつけてタイドプールに全身つかり、材料を熱心に採集していた。指導の外国人の先生方や日本人ＴＡたち総勢 5 名も、全員ではないが、ウエットスーツ姿などで頑張っていた。

そのような状況の中、渚に近い浅いタイドプールで一つの大発見があった。生きたウミウサギをシンガポールの女学生が発見した。最初はとても変わった姿だったので、それがなんだかさっぱりわからなかったそうだ。真っ黒い外套膜をつつくと真っ白な貝殻が背中に現われてくる。黒い大きな軟体部には白い斑点が規則的に散りばめられ、疣（いぼ）の様な突起も幾つもある。その先端もなぜか真っ白である。頭から 2 本の触角も伸ばし、粘液を、多分、体の後方からどっさり分泌する。ウミウサギは刺胞動物に属するソフトコーラルに住みつき、それを餌にもしている。従って、この台風でこの個体は浅瀬へと波にもまれて転がされてきたのであろう。

番所崎付近で生きたウミウサギに遭遇したのは、23 年間も白浜暮らしをしているが、今回が初めてだった。これまで打上物の中に、貝殻の破片がごく少数拾えただけであった。40 年ほど前に八重山諸島の黒島でこの様な姿を見たのが人生初だったが、その殻は今回の白浜のものより多分大きかった。本種はインド～西太平洋に広く分布している。昭和 40 年頃は、紀伊半島が分布の最北限だった記録となっているが、昨今の地球温暖化ではどうであろうか？

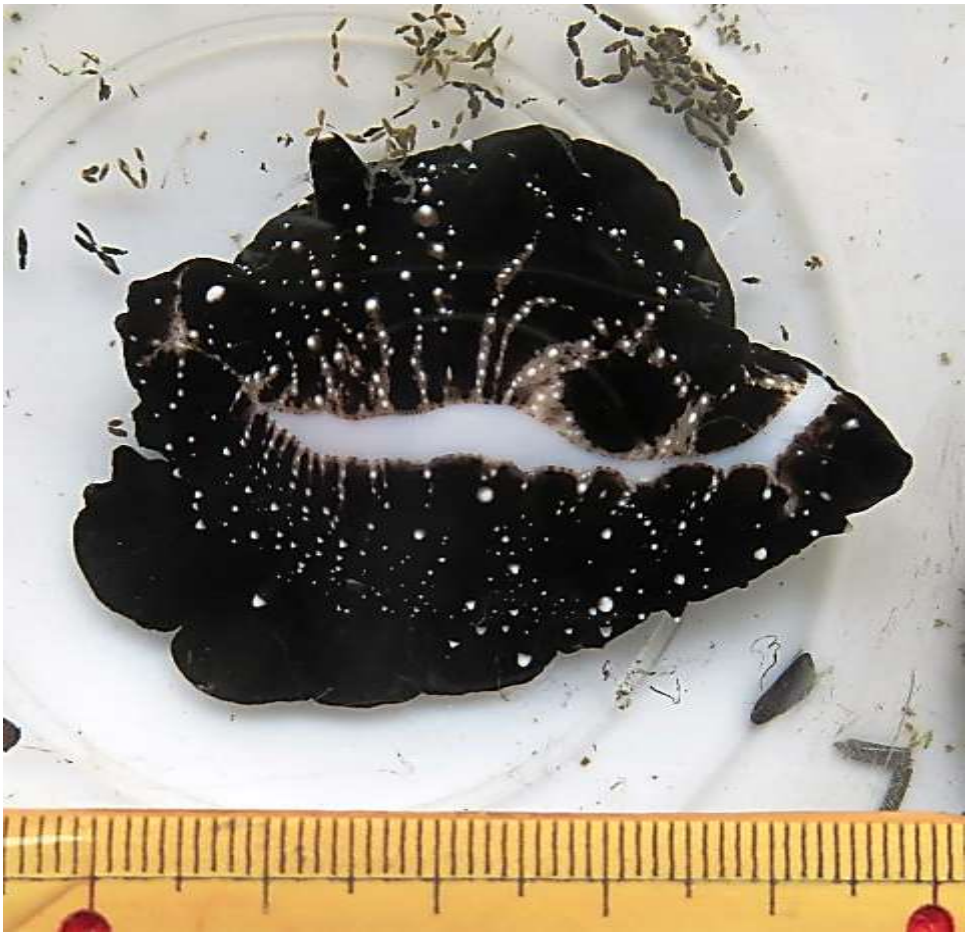


写真　白浜町番所崎のタイドプールで台風通過後に発見されたウミウサギ

7. 有明海と三陸の水辺から(43)　　田中　克

赤浜ロックンロールと民意の行方

日本は世界的に見ても森や海に恵まれた自然豊かな国です。しかし、この間の経済成長最優先の歩みは、すべての生きものの命の源である水が海と陸の間を循環する上で大変重要な結節点となる海辺が、コンクリートによる人工護岸に固められるという深刻な事態を生み出しています。日本の海岸は砂浜と岩礁域の組み合わせで成り立っていますが、砂浜などの自然海岸は著しく減少し、水辺で遊ぶ子供たちが“絶滅状態”化するという深刻な事態に拍車をかけています。

今、このことの“仕上げ”とも言うべき極めて憂慮すべき事態が、震災からの復興の名の下に、三陸沿岸域で進行しています。言うまでもなく、コンクリートの巨大な防潮堤の設置です。この問題に正面から向き合い、岩手県大槌町赤浜地区（写真１）に通い続け、地区のリーダーと若い漁師にスポットを当てた映画監督・小西晴子さんに出会う機会に恵まれました。彼女が赤浜地区でカメラをまわし続けたのは、県や町が提示した 14.5mの巨大な防潮堤を「そんなもの建てたら海が見えねえじゃないか。もう防潮堤には頼らない」とはねのけた、海と共に生きる人々の心意気と知恵を取り上げ、2014 年に「赤浜ロックンロール」というドキュメンタリー映画にまとめ、各地で上映されています。

写真１　ひょっこりひょうたん島と赤浜地区の震災前からの防潮堤（2016 年 3 月 30 日）

関西のように三陸から遠く離れた地では、震災の記憶や関心が時間の経過とともに希薄化する中で、今一度、震災復興の現実を見つめ直そうと、シニア自然大学校「地球環境自然学」講座では、9 月 24 日の講座に小西晴子さんをお招きし、「赤浜ロックンロール」のエッセンスとともに、その後の赤浜地区における街づくりの合意形成過程を追跡したテレビドキュメンタリー番組「民意の行方― 東日本大震災から 5 年」（3 月放映）を鑑賞し、小西さんからこれらの映画や番組作成の意図や問題の核心などに関する講演をお聞きしました。

陸と海の結節点である水際はその環境の複雑性ゆえに多様な生きもの達のサンクチュアリとしてかけがえのないエコトーンです。このいわば「聖域」とも言える水際にどかっと巨大なコンクリートの構造物を据え、地下水による陸と海のつながりにも深刻な影響を及ぼしかねない愚行に対して、野生の生きもの達はきっと「そんな先に人類の確かな未来はないぞ」と不思議がっているに違いありません。「民意の行方」が伝えたのは、その地に根を張って暮らす人々の思いとは異なる世界や次元でものが決まり、一度決まるとそのことを変更することが至難であるという、この国の民主主義や政治のあり様が問われているという問題提起でした。それゆえに、このままでは「交通事故に遭うのと同じ程度の高い確率」で発生が予測される南海トラフに起因する巨大地震と津波に備えて、東海・近畿・四国などの太平洋沿岸に同じことが広がるのではと大いに懸念されます。民意が反映される社会に変えることは、民意を形成する私たち自身の責務であると痛感させられました。

写真２　赤浜地区に隣接した場所には
巨大な防潮堤が建設され始めている（2016 年 3 月 30 日）

＊＊

8. みんなのひろば

とても久しぶりに、うみひるも編集部に２通のご投稿をいただきました。いずれも前号のニュース欄にあった「サンゴ保全活動のおかしさ」という記事（うみひるも 187 号の７ページ）へのご意見でした。

「みんなのひろば」は自由に意見や感想を述べ合って、考えを深めるための場ですので、今回は、会員と事務局という、いわば身内からの投稿ではございますが、あえて全文を掲載いたします。

この件に限らず、「海の生き物を守りたい」と願う同志の皆さんの情報交換・意見交換を目的に、このコーナーを活用していただければと思います。投稿方法は最後をご覧ください。（編集担当：瀬戸内千代）

投稿1

前号のうみひるもで、牟岐の千年サンゴから貝を駆除した記事について気になる書き方がありましたので、お便り致しました。

まず1つ目は、「17人で18個体の巻貝を駆除することは、果たしてサンゴの保護になるのだろうか」「17人ものダイバーが群がってたった18個体の巻貝しか見つけることができなかったことは、これらの巻貝の存在は正常な生態系の姿だと思われる」という文です。サンゴにとって、駆除した貝類18個体が影響を及ぼさないレベルだというデータは存在するのでしょうか？ それが示されない限り、駆除する必要がないという根拠はなく、客観性が失われています。もちろん同様に、18個体の巻貝を駆除する必要があるという根拠もありません。よって、我々が言及できることは、「サンゴを含む生態系の保全に巻貝の駆除が必要であるか否かは未だ不明であり、このような類の保全活動に関しては科学的裏付けを元に慎重に判断すべきである」ということではないでしょうか。また、「ひょっとして、彼らはサンゴ以外の生物がサンゴと一緒にいることがサンゴに有害だと考えているのかもしれない」という次の一文も、個人の感情を勝手に推測したものであり、問題があると考えられます。

2つ目は、「これ（貝）を駆除することは自然の生態系を壊すことでしかないことを、大学生にもなれば理解して欲しい」と書かれている点です。向井先生がこのように書かれたお気持ちはわかりますが、今回の場合、非難している対象が、報道にある13人に特定できるという点で、個人攻撃にあたるのではないかと危惧します。政治家、組織、プロの研究者など、公人を名指しで批判することに問題はありません。しかし、貝を駆除した学生は素人です。生物学を学んでいるかどうかも不明です。今の大学生には高校で生物をやらなかった子もたくさんおり、サンゴと貝類の関係を一般化して、生態系における捕食者の役割といった生物間の相互作用を考えることはできなかったのかもしれません。

彼らは善意でこの活動を行っています。そのような中、もし、この学生達がうみひるもの記事を読んだらどんな気持ちになるでしょう。生物学者から、そんなことも知らないのか、と怒られたように感じるのではないでしょうか。せっかく芽生えた自然を守りたいという気持ちを折り、保全なんてもういいやと思わせてしまわないでしょうか。

編注：次ページにつづく

編注：前ページのつづき

今回のような「市民の善意」は、日本各地で今も行われているアマモやサンゴの移植といった“効果のない”自然再生活動にも共通するものです。概して、その活動の責任は、主催する企業や団体、そして何より、その活動にお墨付きを与える研究者にあります。故に、我々が批判すべきは、活動の効果を信じて行動した素人ではありません。例えば、今回の活動を批判したいのであれば、貝を駆除した学生たちを非難するのでなく、その活動を主催した企業や団体に対し、科学的根拠に基づいた反論を行えば良いでしょう。そうでなければ、自然再生活動に関する問題の根本的な解決には至らないと考えます。

海の生き物を守る会は、海洋生物に関する知識を広め、それを取り巻く様々な問題を理解してもらい、海洋環境を保全しようとする気持ちを呼び起こすために活動していると思います。そうであれば尚の事、団体の姿勢としては、感情的な言論は控えて、あくまでも客観性を大切にした方が、より多くの人々からの賛同を得られるのではないでしょうか。牟岐の地域で、千年サンゴを守りたいと保全活動をしているのは大変素晴らしいことです。その気持ちに最大限の敬意を払いながら、科学的根拠を元に、生態系の保全に望ましい方向をとって頂けるような提言をすることが、自然保護団体の大きな役割だと思います。以上、自戒も含め、申し上げる次第です。

（以上、運営委員の大久保奈弥さんより）

投稿2

No.187 P7の『サンゴ保全活動のおかしさ』というタイトルの記事を読んで、筆者（代表）の書き方にはいささか問題を感じています。ここまで上から目線で書かれたら、当事者は困惑し傷ついてしまうのではないでしょうか。少なくとも大変な不快感を持って反発してしまうのでは……と気になります。

海が好きで自然を大事にして、海の生き物を守ろうとする気持ちには変わりはないのだから、彼らの行為や発言に対して、痛烈な批判と受け取られる書き方でなく、今少し穏やかで説得力のある書き方をして欲しかったと強く思っています。

編注：次ページにつづく

編注：前ページのつづき

海離れが懸念されている昨今です。善意の若きダイバーの皆さんの気持ちもくみ取った上で、誤りならそれを正し、別の考え方もあると言うことを、海に関わる先輩として、研究者として、冷静に指摘すべきではなかったのか……たとえそれが正論であったとしても、相手に受け入れられてこそ……だと思うのです。でなければ「海の生き物を守る会」の意図することと逆の結果となってしまいかねません。

筆者の心情は充分理解しているつもりです。が、『うみひるも』発信前の校正段階でこのことが気になって、あえて文面について再考を促した者として、それが聞き入れられなかったことは、残念な気持ちがしています。

ダイバーの皆さんがどうかこれからも海の環境に関心を寄せて、”広い心”で楽しく海に学びつつ、海の生き物を守る活動を続けて下さることを心から願っています。

（以上、事務局・会員の向井保子さんより）

思っていること 言いたいこと

『うみひるも』へのご投稿は、下記までお送りください。

「うみひるも編集部」専用メールアドレス　hirumo@live.jp

または、便利な投稿フォーム　https://goo.gl/GjWIjL

9. 事務局便り

- 「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は、事務局までご連絡ください。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし、写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。
- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ご一緒に講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会に寄付をお寄せください。口座は会費と同じです。送金内容について事務局までご一報ください

  ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会
- うみひるもの表紙を飾る海の生き物の写真を募集しています。種名同定済みですと、大変助かります。海にお出かけの際にはカメラご持参で。ベストショットが撮れたら、ぜひ編集部までお送りください。

10. 編集後記

『うみひるも』のバックナンバーを見ると、これまでも多くの先生方が紙面にご協力くださっています。今も面白いエッセイを、毎号ご寄稿くださる先生方がいらっしゃいます。素晴らしいことです。写真提供やアンケート回答や投稿にご協力くださる温かい読者にも支えられて、代表の向井先生と奥様の保子さんが手作りで始めた媒体が、すでに 188 号を数えております。現在のニュース欄やイベント欄は、向井先生が一人でネタを集めて執筆していますが、読者の皆様からの情報提供も大歓迎とのこと。より多彩な方々のご登場を夢みて、今号より、執筆者名を明記することにいたしました。ぜひ、どしどしご参加くださいませ。（ちよ）

ここ京都では、紅葉の季節になりました。北海道はもう冬のさなかでしょうか。先週から気温の変化に対応できず、風邪気味の体調が続いていました。めったにしたことのないマスクを付け、首の周りにはウオーマーを巻き付け、一週間を過ごしました。対応が早めだったこともあり、熱が出ることもなく、ようやく風邪も抜けてきたようです。皆様も季節の変わり目には、体調にご注意ください。年末が近づいて、鬼が笑うという来年の予定を急いでいます。2 月 18 日には、去年「関西で」と約束しましたように、京都でシンポジウムと海の生き物を守る会の総会を開催します。各地で公益のためと言う名で蝕まれている海の自然をどう守っていくか、みなさんといっしょに勉強し議論したいと思います。もっとも寒い時期の京都ですが、ぜひ予定に入れて、冬の京都観光も兼ねてお出かけ下さい。お待ちしています。（宏）

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。年会費は個人 2、000 円、団体 20、000 円。匿名による参加も可能。会員は、各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行い、そのための助成金申請をすることができます。入会希望の方は、事務局まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

メールマガジン『うみひるも』第 188 号
2016 年 11 月 16 日発行
発行「海の生き物を守る会」代表　向井 宏
編集：瀬戸内 千代
〒606-8413　京都市左京区浄土寺下馬場町 69 番地
TEL&FAX:075-741-6281　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ URL：http://e-amco.com/
銀行口座：ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会
全銀システムで送金する場合は、068 店（ぜろろくはち店）0667302 ウミノイキモノヲマモルカイ